

# 有島武郎「首途」論(二)

——「某年八月十八日。晴。」から「某年八月二十九日。曇。」まで——

尾西 康充

一、「某年八月十八日。晴。」

この日の記述の冒頭では「淋しくなり勝る木の枝をいたはるやうに、今日も太陽が朝から夕方まで眩しい光を惜しげもなく投げ与えた」とフィラデルフィアの晩夏の風景が描写され、「夕焼は見る者の眼を涙させる程荘厳なものだった」と宗教的な境地に近い感情が表現されている。秋の早い訪れを感じさせる日の昼飯時に「ミュラーといふ独逸生れの患者」が「Aは何故この頃食堂の手伝をしないのだ。お前があないと淋しい」と発言した。

ミュラーはかつて「ある工場の職工長」で「非常に勤勉な男」だったのだが、「如何かしたはずみ不図自殺の誘惑を感じ出し」て「鉄道線路とか、高い崖の上とかに来ると、自然に死の方に無理々々牽きつけられてゆく、その恐ろしさに、自分から進んで入院」したという。フィラデルフィアのあるペンシルベニア州は、州人口の四分の一がドイツ系移民を祖先に持つ。開拓時

代から信仰の自由が保障されていたために、神祕主義的あるいは敬虔主義的な信仰を持つドイツ人がカトリック教会によって迫害され、この土地に移住してきた。なかでも機械化を拒否し質素な生活様式を維持する再洗礼派のアーミッシュ(Amish)が有名で、彼らは「ペンシルベニア・ダッチ」(Pennsylvania Dutch)といわれるドイツ語を話す。長友雅美氏によれば、フィラデルフィアにドイツ系移民が信仰にもとづく「ユートピア共同体」を形成した例として、一七三二年にコンラット・バイセル(Johann Conrad Beissel, 1691-1768)がエフラタ修道院(Ephrata Cloister)を創設したことがあげられるという(一)。「職工長」で「非常に勤勉な男」というミュラーの人物像は、工業技術に長けた生真面目なドイツ系移民の特徴を表現している。しかし「一分一秒も無駄にしまいという風で、顔を真赤に汗ばませながら、せつせと働く姿を見るのは惨ましい程だ」という行動は、本来褒められるべきものかもしれないが、その緊

張が高まりすぎると狂気におちいる危険が生じる。それは強直神経症の「仕事中毒、仕事依存（嗜癖）」の症候といえる。休息する暇もなく働こうとする彼は「患者でありながら食堂の仕事を手伝」つて、「[leader worker]の「A」がいないと「食堂の仕事が面白くない。然し君余り働いて僕のやうになつてはいけないよ」と発言する。「観想録」第六卷（一九〇四年七月二十五日）には、ミュラーのモデルとなつた同名の人物の姿が記されている。

余ハ猶一患者ヲ注意シ出シヌ。ミュラート云ヘル人ナリ。余ガトルストイニ似タリト云ヘリシ人ノ左側ニ坐シテ食ス。丈高ク稍瘦セテ面赤ク眼鋭ク血性ニシテ誠実ナル質ナルコト直チニ看取セラル可シ。彼ハ *overwork* ノ為メ其健康ヲ誤チタルナリ。彼ハ他ノ患者ノ如ク無為ニ日々ヲ過スヲ厭ヒ、食堂ノ始末ヲ助ケ庭園ノ除草ヲナシ以テ快樂トナス。自ラ云フ「労働ハ余ガ快樂ナリ」ト。而カモ悲ム可シ、彼ノ心ハ敢テ常ニ自殺ヲ謀ラントスルナリ。高キニ攀ツレバ身ヲ投シ、鐵路ヲ過レバ身ヲ横ヘントス。彼ハ自ラ之レヲ病トス。而カモ止メ難キナリトゾ。余ハ彼ノ誠実ナル面ヲ見守ルヲ快トナス。誠実ヲ表顕セル面ハ美ヲ表顕セル面ト共ニ美ナリ。

有島は「丈高ク稍瘦セテ面赤ク眼鋭ク血性ニシテ誠実ナル質」

を持つ「ミュラー」の風貌がロシアの文豪トルストイに似ていることに気づく。日露戦争に際して英タイムズ紙に反戦を主張する論文を寄稿したトルストイに尊敬の念を深めていたので、この患者に対して関心を抱くようになった。翌日の日記にも「Collier's Weekly」ヲ読シ、Tolstoy ガ其熱烈ノ筆ヲ振フテ己ガ国民ト戦ヲ良シトスル人々トヲ攻撃セル文ヲ見ル。予言者ノ老テ益盛ナル意気称ス可キカナ」と賞めている。「ミュラー」が「労働ハ余ガ快樂ナリ」といいながら「常ニ自殺ヲ謀ラントスル」ことに胸を痛めている。だが日記では「彼ノ誠実ナル面ヲ見守ルヲ快トナス」という印象を持つているのに対して、「首途」ではミュラーの発言を聞いた「A」は「僕の父は二度ほど狂人として取り扱はれねばならぬ状態に陥つた事」があつたために「恐ろしくなつた」という。有島は「私の父と母」（「中央公論」、一九一八年二月）という回想録のなかで「一時に或る事に自分の注意を集中した場合には、殆ど寝食を忘れて終ふ」ために「国事」でも或は自分の仕事にでも、熱中すると、人と話をしてゐながら相手の言ふ事が聞き取れない程他を顧みないので、狂人のやうな状態に陥つた事」があつたという。

また日記にはリリーに対する思慕を振り払おうとして「好来！ 労働ヨ」と仕事に集中しようとし、「汝ハ余ガ苦痛ヨリノ rage」ナリ。働ケ働ケ、顛顛ヨリ血潮ニジミ出デン迄働ケ」という決意を抱いている（一九〇四年八月一五日）。有島の労働に対するこのような態度は、ミュラーの症候にも通じるもので、

この点でも彼に共感を抱いていたと思われる。

他方、スコット博士と「A」は「昨日も今日も互いに探り合ふやうな態度」で暮らしていた。夕方、博士は一封の手紙を内懐ろからとり出し、「他人に知らせずに投函」するやうに「A」に依頼した。「A」は博士から「段々信用を受けるやうになつた事」を察した。だが「言葉少なにうなだれて坐つてゐる博士は時々ひよつと顔を挙げて耳を敏てゝみでから、苦い顔をして何かぶつくと囁くと、「A」は博士の囁きが「そこを退け」であることを知る。「不快」を感じながら立ち上がった「A」を博士はあわてて引き留めて「すがるやうに僕の方にすり寄つて」くる。博士は思考と行動が分裂した精神病の症状を呈し、病房に帰ろうとする「A」に対して、つぎのやうに尋ねる。

「A！ お前は基督信徒か」

いよく病房に帰らうとする時、偶然のやうにかう彼れは僕に尋ねた。僕は偶然にも——多分病人の気休めといふ心も何処かにあつたのだらう——「さうだ」と答へた。而して二人とも心の不安を包み兼ねるやうに互に顔を見交はした。

スコット博士の「お前は基督信徒か」という問いに対して、「A」は「病人の気休め」という気持ちもあつて「さうだ」と答へた。いつも「固定した思想の堅実さ」を示している博士な

のだが、このときは「偶然のやうに」質問し、「A」も「偶然にも」正直に答えている。そして二人とも「心の不安を包み兼ねるやうに互に顔を見交」わした。そしてこの夜は、「A」は「休み番」だったので、患者の世話を一緒に夕食を済ませると、すぐに三階の看護士室に退いて、くつろぎながら「C教授の書いた『ゲーテと内部生活』といふ論文」を読んだ。

この大詩人と基督教思想との交渉が可なり精緻に研究されてゐる。何もかも高い所から静かに見おろしてゐるやうなこの詩人の心の鏡に、一向に上ばかり見窮めようとする信仰といふものが如何映つたらう。さまざまな人の心だ。ある時は心外の諸縁に餓鬼同様の妄執を繋ぎ、ある時は内部の見神に本能自然の憧憬を向ける僕の心は、まるで三界流転の亡者のやうだ。浅ましい姿ではないか。

この論文を読んだ「A」は、ゲーテとキリスト教思想の交渉が「精緻に研究」されていることに着目し、「何もかも高い所から静かに見下ろしてゐるやうなこの詩人の心の鏡」に「一向に上ばかり見窮めようとする信仰といふもの」が「如何映つた」だらうかと感じてゐる。高い所から見下ろす詩人の「心の鏡」と、上ばかりを見きわめようとする「信仰」との対比がなされたうえで「さまざまの人の心、すなわち「心」の相対的なあり方」に関心を寄せてゐる。自己においても「ある時」は「心外の

諸縁に餓鬼同様の妄執」をつなぎ、「ある時」は「内部の見神に本能自然の憧憬」を抱く「心」を持ち、まるで「三界流転の亡者」のような「浅ましい姿」になり果てているという。あくまで自己の内面に拘泥しようとするのは、内村鑑三がシーリー総長から「徒らに自己の内心のみを見ることを廃めよ、貴君の義は貴君の中にあるに非ず、十字架上のキリストに在るのである」と教えられ、十字架上のキリストだけが贖罪の力を持つことを覚知したことに比べれば両者の差は著しい。

ところで「観想録」第六卷（一九四〇年八月一四日）には、  
ごきのような記述がある。

夜ハ休ヲ得タリ。室ニ皈リテ入浴シ暫ク読書ス。Harvard Univ. ノ独逸語ノ教授ナル某氏ガ、Goethe ノ百五十年ヲ記念シテ、Outlookニ掲ゲタル小品最興味アリ。

当時のハーバード大学の関係者を探してみると、ケンブリッジ組合教会牧師でハーバード大学のドイツ語の授業を担当していたレイモンド・コーキンス博士(The Reverend Dr. Raymond Calkins, 1868-1967)がいた(2)。一八六九年にニューヨークのバツファローで生まれたコーキンス博士は、一八九〇年にハーバード大学文学部を首席卒業し、カルフォルニア州にあるベルモント男子校で外国語教師を務めた。アイオワ州にあるグリーンネルカレッジ(Grinnell College)で現代語教授になった。ま

もなく母校に戻って大学院でフランス語とドイツ語を学び、一八九四年に修士号を取得すると、言語学教授としてイェールやコーネル大学などから招聘され、ハーバード大学でも創設されたばかりの比較文学部から誘いを受けたが、それらを断ってハーバード神学校に特待生として入学する。一八九六年に牧師に任命され、ピッツフィールドとポートランドの組合教会の牧師になった後、一九一二年からはケンブリッジの第一組合教会の牧師を務めた。牧師の他にも伝道師や教師、学者などの多様な側面を持つ人物で、著書は『ヨハネの黙示録の社会的メッセージ』(“The social message of the book of Revelation”, 1920)や『使徒教会と現代世界』(“The Christian Church and the Modern World”, 1924)、『聖霊』(“The Holy Spirit”, 1930)など枚挙にいとまがない(3)。ハーバード大学の図書館には、彼が学部生の頃に使った「ドイツ文学 ゲーテ」(一八八八年)と、院生の頃に使った「ドイツと教会史」(一八九三年)のノートが二種類保存されている(4)。

また週刊紙「展望」(Outlook)は、一八七〇年にニューヨークでJ.B.フォード(J.B. Ford)によって創刊された「キリスト教組合」(The Christian Union)の後継紙で、一八九三年に「展望」と改称、さらに一九二八年に「展望と独立」(Outlook and independent)一九三二年に「展望」(Outlook)と紙名を変更しながら継続された。

有島は右の引用に続けて、「Goethe ノ百五十年ヲ記念」して

「展望」に掲載されたコーキンス博士の論文を読んだ感想を、つぎのように記している。

彼ハGoetheガ精神的作物トシテFaustヲ第一ニ掲ゲ、是レニ次ギテ“Wilhelm Meister”ヲ挙ゲ、之レニ次ギテ“Affinity”ヲ挙ゲタリ。而シテ其結論トスル所ニ曰ク、Goetheハ実ニ近代思想ノ権化ナリ、彼ハ近代ノ思想ガ到達シ得可キ最極ノ点ニマデ達セリ、彼ハ彼ノ“individuality”ヲ其極点ニ發達セシメ其極“self-sacrifice”ノ堂奥ニ入レリ、彼ハ肉ヨリ靈ニ到リ、卑ヨリ高ク昇リ、疑惑ヨリ確信ニ達セリ、彼ニハ凡テノモノ自活ノ器タラザルハナカリキ、彼ニ取リテハ罪スラモ彼ガ教導者ナリキ（論者ハliterallyニカク云ヘリ。サレドモ是レ必至ノコトノミ。一層適切ニ云ヘバ人ニ取リテハ罪ノミガ教導者ナラズヤ）基督教ノ教エル所ハ自己ヲ聖化シテ天国ヲ来ラスニアリGoetheノ教エル所ハ自己ヲ聖化シテ自己ノ中ニ天国ヲ見出スニアリト。多少ノ觀察ナカラズトセズ。

神戸女学院大学附属図書館には、この時代の「展望」が部分的に所蔵されているが、残念ながらコーキンス博士が著したとされる「Goetheノ百五十年ヲ紀念」の記事を見つけることができなかった。コーキンス博士によれば、ゲーテは「近代思想ノ権化」で、「近代ノ思想ガ到達シ得可キ最極ノ点」に到達した。

「個性」(individuality)を「極点」にまで發達させ、その最極の「自己犠牲」(self-sacrifice)の「堂奥」に入ることによって、「肉」から「靈」に到り、「卑」より「高」く昇り、「疑惑」より「確信」に達することができたという。そしてそこではすべてのものが「自活の器」となり、「罪」さえも「教導者」となる。キリスト教では自己を「聖化」して「天国ヲ来ラス」と教えるのだが、ゲーテは「自己ノ中ニ天国ヲ見出ス」という。このような主張は、ゲーテやシラーの芸術觀から強い影響を受けた北村透谷が、たとえ普段「力としての自然」に圍繞されてはいても、「造化主」から許された「意志の自由」をもつて「実を忘れ、肉を脱し、人間を離れ」た境地に到達することによって、「絶対的の物、即ちIdea」を看取することができる」と主張したことに通じる（「人生に相渉るとは何の謂ぞ」、「文学界」第二号、一八九三年二月）。

## 二、「某年八月二十一日。晴。」

この日は「丁度十日美しい初秋の日が続いた」と書き出される。静かな秋の気配が「何となく逼り近づく寂莫裡に立つて、自分の心をぢつと見詰めてみると、無数の想が唯一筋の真直な道のやうになつて、醜美が手に取るやうに心の眼に映つて来る」と描写される。「A」は友人の看護士ロバートと一緒に「後園」を散歩する。まだ「P府にゐてある神学校を訪問」したときに

彼と知り合い、この病院の同じ病房で偶然落ち合うことになった。「寒い程の青白い色に咲き乱れた」百合の花を三輪摘み、ロバーツと別れてからリリーの家に回って、その階段に「一輪をおいた。他の一輪は自分の枕許のコップに挿し、一輪は日記に挿し花としておいた。翌朝、階段におかれた百合の花に眼をとめるだろうが、リリーはただ一輪の花を見るだけで、自分とは同じ「心持ち」にはならないだろうと「A」は予想する。

夜一二時を過ぎてスコット博士が「狂燥状態」におちいつたと不寝番が起こしてきた。「A」が急いで彼の許に駆けつけると、「長い真白な寝衣一つ」になった博士は「両手に頭髮を掴み」ながら「押付けられるやうに部屋の隅に立ちすくんで、何物かを見入るらしく一ヶ所に眼を定めてわな／＼とと震へていた。

「そこを退け、そこを退け」という言葉を最初は「小さく囁や」いていたが、最後には「わめくやうに高く」なつて「とう／＼堪へ切れずに、頭を抱へたまゝ壁の隅に顔を隠」した。静かに近づいて「何んです」と問うた「A」に対して、「憚るやうな低い声」で「あれを御覧A」と天井を指さした。「A」には、博士の神経が「段々荒んで行く」やうに思われ、不寝番に手伝つてもらつて「纏絡浴」をすると鎮靜して、やがて博士は「うと／＼眼り出した」。食事や排泄、睡眠と同じように入浴するのも日常生活の身辺処理能力に関わる作業療法の一つで、フレンド精神病院では精神障害を抱える患者に対して人間的に接する「道徳的

待遇 (Moral treatment) を実践し、このような「作業療法」や「娯楽療法」を重視していた。「纏絡浴」とは、浴室内で患者に椅子に座らせてシャワーを浴びさせて、興奮を静める方法である。「A」によれば博士は「今までの緊張に引きかへてゆるみ切つた顔面筋を被ふ黄蟬のやうな皮膚を見つめてみると、死よりも物凄くある恐怖が膚を粟だたせる」という。

昨日の午後、妻と「三人の可憐な女の児」が博士を見舞いに訪れていた。博士は「沈着な態度で彼等と親しげに」話していたのだが、病房に帰るときには彼女たちの来訪を忘れてしまつていた。そのことを思い出しながら「二時半擱筆」と書いて、「A」はこの日の記述を終える。

### 三、「某年八月二十三日。雨。」

「昨夜から降り出した激しい雨に乗じて一人の患者が病房を逃げ出した」ことが発見された。「紐育市の金持ち」の彼は「酒と女に」身を持ち崩した「四十男」で、「仕立ておろしの見事な洋服にだら／＼とスープなどをこぼしたまゝである」のがしばしば見かけられた。患者は運動のために「球戯室」に向かい、スコット博士はその「附属室の隅」にある「皮張りのデイバン (Dayvan ソファ)」に「身を埋めて黙つて考へ」ていた。「A」

は博士の側に立って「窓から薄暗く射しこむ光をたよりに」ダ  
ンテを読みながら内省する。「A」によれば自分は「人並み以上  
の才能を受けて生まれて来た」が「それを捨つべきものゝ如  
くに踏み躪つた」、家には「華やかな社会に推し薦めるだけの資  
力と位置」があつたが「ぐぢぐぢに拒んでしまった」、「人から  
愛され親しまれる性情を持つてゐる」が「好んで孤立した」。自  
分があえてこのような行動をとつたのは「自己と真実な交感を  
したい」ため、「不自然をさへ敢てして、あらゆる内外の負担  
物を捨てよう」とあせつた「挙げ句に「神にさへ叛いた」といふ。

だが「こゝまで来て静かに自分の身の回りを眺めて」みると「諸  
縁から絶ち放たれた自己の余りに淋しく余りに乱雑なのに驚  
く」。「聖者になるには余りに人間の欲情を持ち過ぎる」し「凡

人になるには余りに潔癖過ぎる」のは、自分の「生命」が「元始  
的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分  
解されてゐる」からだと思ふ。しかし「自己の分解を徹底」さ  
せ、「掘り下げて」遂に個性を見失ふか、又はそこに不壊の金  
剛土を見出すか「まで追求するのが「一生の事業であらねばな  
らぬ」といふ決意を持つのである。

こうして「A」は「何時か必ず自分を実証する」と決意し、  
自己の「存在を存在として味識する」までは「決して休むまい」  
と考える。このように自己の存在を問ふことは自我の心理的発  
達において誰しもが経験することだが、「神にさへ叛いた」と感

じるまでの徹底した追求は、単なる自己否定をこえた神経症の  
発生を予感させる。ジャック・ラカンによれば、神経症患者に  
とつて重要なことは『私は何か』あるいは『私は存在している  
のか』という問いであり、これらの問いが「想像的なものと  
して再活性化されるのではなく、象徴的なものとして呼びさま  
されるという限りにおいてこそ、神経症という代償不全が引き  
起こされ、その諸症状が組織化」されるのだという(5)。すな  
わちこの場合「A」が自己の存在を問う方法は、他の何ものに  
置き換えて答えようとするイマジネーションの難しさではな  
く、そもそも主体の概念を成立させる象徴的なものを自己その  
ものによつて代替させているというシンボリックな境位での困  
難であるといえる。

内省に耽りながらダンテを読み進める「A」に対して、博士  
は「朝から沈黙」を続け「怪しい瞑想はしとくと落ちる雨の  
雫と一緒に静かに深く地の底に滲み込んで行く」ように思われ  
た。

昼過ぎの空が一入陰鬱な雲にどよんで、部屋の隅々にも  
う夕暮の影がさまよひ出したかと思はれる頃、博士はふと  
顔を挙げて僕がダンテに読み耽つてゐるのに眼をつけると、  
独語のやうに、ダンテは何故基督を敵に渡したイスカリオ  
テのユダと、シーザーを刺したブルータスとを地獄のどん  
底におとし入れたのだと尋ねた。僕は「その最も親しむべ

きものを売ったからでせう」と答へた。と、博士は聞くまじきものを聞いたやうに眼を見張つてゆるく唇を開いた。極度の恐怖の描き出されたその顔は、眼も向けられぬ程無気味だった。彼れは暫くさうした体で僕を見つめてゐたが、やがて牛にやうに苦しげに呻いた。而して死のやうな沈黙がその後続いた。

博士は沈黙を破つて「独語」のように、ダンテはなぜキリストを敵に渡した「イスカリオテのユダ」とシーザーを刺した「ブルータス」とを「地獄のどん底に陥れた」のかと尋ねた。「イスカリオテのユダ」も「ブルータス」も『神曲』地獄篇第三四歌の第九地獄第四円で三面六翼の魔王ルチフェロによつてかじられる、「イスカリオテのユダ」は「天辺で最もひどい罰」を受けている「ジユダ・スカリオット」として登場し、頭はルチフェロの口内にあるのに対して脚は口外でばたつかせている。「ブルータス」は逆さまに吊られ「黒い鼻面から垂れ」下がっている。ちなみにルチフェロにかじられているもう一人は、カエサル暗殺の首謀者の一員であつたガイユス・カツシウス・ロンギヌスであつた。このように「囃まれるのは爪で引き裂かれるのに比べ、痛苦、ものの数ではあるまじ」という地獄の責め苦を受けている「イスカリオテのユダ」と「ブルータス」の境遇について質問をした博士に対して、「A」が「その最も親しむべきものを売ったからでせう」と答えると、博士は極度の恐怖を顔に浮

かべた後、「死のやうな沈黙」を続けたという。この後、「博士に附添つて病房に帰る」途中、「ふとリリーとすれちがつた」。「A」は彼女がいつ帰つてきたのだらうと不思議に感じる。

廢園に唯一輪咲き出た花のやうな彼女は、半外套に肩をつゝんで、華車な編上げ靴の爪先きに雨をいとひながら、小走りに歩いて来たが、きつと頭を挙げるとやさしい微笑と共に快活な黙礼を博士と僕とに投げて側をすり抜けた。水のやうに悒鬱に寒く閉ぢてゐた僕の心は、その瞬間に暖かく嬉しく跳り上つた。然し僕はあの何事も知らぬ純潔なリリーに対してすら、唯清い嘆美の情を向けてゐると自分を欺きながら……腐り切つたセンチメンタリズムよ。僕の心はずぐ又水よりも冷たく堅く閉ぢてしまつた。

「廢園に唯一輪咲き出た花のやうな」リリーの「やさしい微笑」と「快活な黙礼」は、それまで「水のやうに悒鬱に寒く閉ぢてゐた」心を暖かくした。だが「A」は「唯清い嘆美の情を向けてゐると自分を欺」いていたことに自己嫌悪を覚え、再び「水よりも冷たく堅く閉ぢてしまつた」という。リリーとの再会は「死のやうな沈黙」を続けた博士とともに恐ろしい死の世界を体験した後におこなわれたことを考えれば、「ふと」すれちがつたことやいつ帰つてきたのだらうと思われたことなども合

わけて、リリーの幻覚を見ていたのではないかと推測できる。

「A」にとつてリリーは〈死〉の世界からの甦生をうながしてくれる(生)の存在ではあるが、それと同時に倒錯した性愛の対象でもあり、リリーに愛情を感じて「戦く」心境が作品中でたびたび表現されているように、「A」の内面に葛藤を呼び起こすジレンマを内在させている。リリーに見られているという幻覚は「A」の神経症を感じさせ、しかもこの想像的な葛藤が性的倒錯のために自己と他者との象徴的な統合を不可能にしているのである。

#### 四、「某年八月二十四日。晴。」

明け方になって嵐は静まり、秋の朝の「厳肅な静けさが涙となるまで」心に迫ってくる。午後、「A」はスコット博士と庭を歩きながら「心霊上の諸問題」を話し合った。博士の心中にある葛藤は「丁度もつれあつた種々の色糸のやうに、一つをほごさうとすれば外のがほつれ、外のをほごさうとすれば更に外のがほつれる」という「果てしない円周を果てもなくぐるぐるとめぐつてゐる」やうなもので、彼の議論を聞いていると「ひとりでに輪廻とか予定とか」のことが暗示されて恐ろしくなる。今までも「幾度も躊躇」しているようだったが、博士はついに「心の秘密」を打ち明けた。その内容はずいぶんやうなものであつた。T州で農場を経営していた弟とは二三年も顔を

合わせなかつたが、「本統に心のままな勉強家」であつた弟は、豊作の秋にはいつも收穫物を分けてくれた。だが三ヶ月ほど前、雹害によつて麦の收穫が皆無となつたために「非常な経済界の恐慌」が発生して銀行が破産して、農場と銀行の整理に奔走し「逆も見込みはなささうだ」と知らせてきた。そのとき「何を措いても弟に遇つて言葉だけで、も慰め励ましてやらなければならなかつた」のだが、「克己心の勝つた弟」から「割合に平気らしい音信」があつたのに「氣を許して」しまつていたところ、ある朝突然、自殺の通知が来た。そのとき博士は自分が「神に咀はれた身」であることを覚知し、元来「スペンサー派の哲学の捧誓者」で「心霊の問題などは度外視」していたにもかかわらず、「あまりの苦悶に堪へかね」て教会に出席してみる氣になつた。「監督教会」の「まだ年若かな鋭い眼を持つた牧師」は「カルビンを思はせるやうな妙に浸滲的な熱のこもつた低い声で、諄々と予定説」を説教した。博士は「極めて冷静な批評的な態度」で聞き、「聴衆の昂奮を心竊かに晒ひたい程冷静」だつたのだが「帰りがけに一人で或る一本の桜の樹の下まで」くると「貴様はカインと一緒に永遠に咀はれた靈魂だぞ」という「悪魔の声」を聞いたという。

博士によれば、自分には耳以外に「音声を感知する機関」があり、その「精密な確実な機関」を通して「悪魔の声」を聞いたことから「絶えず悪魔の声に脅かされる」ようになることも「正義の神の厳存をしかと心の底に感ずる」ようになったと

いう。一般的に、自分が超越的な何かにつねに監視されている、あるいは囁きかけられていると感じるのは分裂症の一症候である。迫害妄想とされ、「悪魔の声」を聞けば聞くほど「神の愛」の存在を信じ、それゆえに「神は愛だ。それは畏ろしい事なのだ」という自我を分裂させるダブル・バインド（二重拘束）の状況におかれる。精神分析学の新宮一成氏は、分裂症患者の心理と宗教的・芸術的な精神土壌とは「私が神を迫害すると神は私を愛し、私が神を愛すと神は私を迫害する」という「独我論的世界」に見られるダブル・バインド理論において適底するものであることを指摘した（6）。博士を狂気の淵に追いやった直接の原因は弟の自殺であったが、それを決定的にしたのは「監督教会」の「まだ年若かな鋭い眼を持った牧師」が説いたカルヴァン派の予定説であった。監督派教会 (Episcopal Church) とは、聖職者のみが教会の運営に当たる。アメリカ・キリスト教会史では、一八世紀の半ばにメソジスト派が万人救済説と予定説を巡って分裂し、元英国国教会の牧師でメソジスト信仰復興運動の指導者ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-1770) のグループがカルヴァン派の予定説を奉じて独立した。

そもそも予定説とは「神があらかじめ憐れみからある者を選びに、義からある者を滅びに定めた」という二重予定論 (double predestination) が代表的な教説とされ、「神の主権性と神の恵みの無制約的な自由をその徹底性において」受けとらうとする

ものであるが、予定論に関して神学史は「教義のもつ決定論的な外見を緩和し、人間の主体性に余地を与えようとする」方向に進んでおり、「人類を選びに定められているものと滅びに定められているものとの二つの部分に分けることに現代の神学は賛成しない」とされている（7）。だが博士は予定説に従って、神の「愛のみが義しい」がゆえに「世の最初から最終に互つて据ゑられた運命の道を塵ほども枉げようとはし給はぬのだ」と考へ、「悪魔の声」によって「貴様はカインと一緒に永遠に咀嚼れた靈魂だぞ」と脅かされると、自分の運命が滅びに向かうことを決定されているに絶望してしまふ。

さらに博士は「A」に向かつて「お前は自分の力で運命を變へる事が出来ると思ふのか」と問い、さらに「お前の顔には儼しい叛逆の色が浮かんでゐる。強いても天地の大事実を枉げようとする苦痛がお前の顔には書き記されてゐる。それは然し哀れむべき人の子の哀れな妄想に過ぎないぞよ」という。このような博士の告白を「黙つたまゝをのゝいて」聴き入っていた「A」は絶望を深める。

眼の前には果てしもない暗黒が峭壁のやうに果てしもなく連つてゐる。後ろには底無しの深淵が音も立てずに凝然と澱んでゐる。僕は死力を尽して自分の周囲から暗黒を追ひ退けようとしてゐるのだ。僕は一人で、僕一人の力でそれを押しもどして行かなければならない。然し暗黒は動も

すれば却て僕を呑まうと逼つて来る。その暗黒に大きく書かれた字を読み、「Raphel bai ameth sabi almi。」永劫に意味の知られない一連の魔語！

「A」によれば、自分の目の前には果てしもなく「暗黒」が連なり、後ろには「底なしの深淵」が激んでいる。「A」はその「暗黒」を「死力を尽して」追い逃げようとするが、「一人の力」でそれをなさねばならないために、かえって「暗黒」は自分を「呑まうと逼つて」くるという。「暗黒」には「永劫に」意味の知られない「Raphel bai ameth sabi almi」という「一連の魔語」が大書されている。この場面では「暗黒」との闘いを独力でこなおうとする「A」の内面の苦闘が描かれているが、それは光と闇とを支配する〈神〉や〈悪魔〉といった象徴的なものとの葛藤ではなく、自己の主体を確立できずに苦しんでいる光景である。〈神〉によつて決められた滅びという〈予定〉を覆そうとした博士は、自分と同じ性向を「A」のなかにも見出し、彼の顔には「叛逆の色」が浮かび「苦痛」が書き記されていると発言したのだが、実は「A」は〈神〉との闘いではなく、〈神〉を否定した後には主体の境位を失った自我の「暗黒」の苦しみにとらわれていたのである。

「Raphel bai ameth sabi almi」とは、『神曲』地獄篇第三二歌のなかでバベルの塔の立案者ネンプロットが怒鳴った意味のない言葉の羅列である。ダンテは旧約聖書「創世記」第一〇章

九節に登場する「地上の最初の権力者、力ある漁師」ニムロデをヒントにしてネンプロットを創作し、ヴィルジリオはネンプロットの「邪な思いにより、世界は唯一つの言語だけを用いられなくなつた」と責め、「どの言葉もかれに通じないのは、誰にも判らぬかれの言葉が、ほかの言葉と何の係りも無いと同前」という。「A」にとつてこの「一連の魔語」は、『神曲』で使われる「意味のない言葉の羅列」という「意味」を持つて登場することから、〈他者〉によつて発せられる記号の意味を読み込もうとすることによつて記号に関係づけられる〈他者〉を自己の内面に見いだして主体の境位を確保しようとした。ラカンが「主体は〈他者〉の領野にシニフィアンが現れるかぎりにおいて生まれる」と指摘したように、「A」の試みは「暗闘」のなかに現れた「一連の魔語」を通じて自己の主体を生みだそうとするものだったのだが、そもそも意味不明の文字の羅列に対して「それぞれのシニフィアンが他のそれぞれのシニフィアンと関係しているという点については確かだと考えるからこそ、これらの文字をシニフィアンであると結論」できるのであつて、ダンテが「一連の魔語」を「誰にも判らぬかれの言葉が、ほかの言葉と何の係りも無い」と記したように、何かの意味を示す言葉として働かず、自己に向けて発せられた〈他者の語らい〉にはならない(8)。さらにラカンによれば、「ヒステリー」は「シニフィクションについて謎のままになっているシニフィアン、そういうシニフィアンを巡る闘い」であるという(9)。「A」が

「自己と真実な交感をしたため」に「不自然をさへ敢てして、あらゆる内外の負担物を捨てよう」とあせつた」挙げ句に「神にさへ叛」くまでに至つたのは、「永劫に」意味の知られない「一連の魔語」をめぐる問いの果てしなさに照応し、自己の存在をめぐる問いが反復強迫として続けられたのである。

## 五、「某年八月二十九日。曇。」

スコット博士が絶えず「そこを退け悪魔」という言葉を発するようになった。何とかして「論理の輪廻」から救い出そうとして「A」は「意志の自由」や「罪悪」について話し合うのだが、博士の容態は段々險悪になつて「重症患者に特有な口臭」が漏れはじめ、「A」もまた落ち着きを失つてしまふ。

博士に予定説を説いた牧師とは一体何者だ。図書館の塵の中から引ずり出して来た貴様の神学は、一人の人間を狂気に誘ひこみ、死に陥れようとしてゐるのだぞ。冷やかな言葉で行ふ殺人犯……それを平気で犯しながら、自分だけ天国に救はれて行かうとする貴様と、熱い情慾で自分から地獄に落ちたフランセスカやパウロを較べて見る。「不幸に臨めるの日、歓楽の時を想ひ起すより悲しきはなし」。貴様にその言葉が判るか。せめてはそんな言葉を心から云はねばならぬ人のある事が判るか。……然し牧師が博士を狂気

にしなかつたら、石が狂気にしてゐたかも知れない。牧師が博士を殺さなかつたら塵が殺してゐたかも知れない。牧師も亦大きな無情な歯車の一つに過ぎないのではないか。今僕の心には世界が氷つて了つたやうに見える。

「A」の内面の独白は、博士に予定説を説いた牧師に対する非難からはじめられる。図書館の塵の中から引ずり出して来た貴様の神学」が「一人の人間を狂気に誘ひこみ、死に陥れようとしてゐる」と痛罵し、「自分だけ天国に救はれて行かうとする貴様」と「熱い情慾で自分から地獄に落ちたフランセスカやパウロを較べて見ろ」という。「フランセスカやパウロ」とは、『神曲』地獄篇第五歌に登場するフランセスカ・ダ・リミニとパオロ・マラテスタのことで、二人は不義の密会をしているときにフランチェスカの夫でパオロの兄ジャンチオット・マラテスタに殺されてしまふ。そもそもフランチェスカとジャンチオットの結婚は政略的なものであるうえに、ジャンチオットが自分の醜顔を恥じて弟を身代わりにして結婚を成立させたという背景があつた。しかし彼らは自制を喪失した罪を問われて、愛欲に耽つた人間の魂が激しい風に吹きまくられている地獄第二圏に落とされる。一方、弟を殺したジャンチオットも、弟アベルを殺したカインに因んでカインと名づけられた地獄第九圏第一円に落とされる運命にある。「A」が引いた「不幸に臨めるの日、歓楽の時を想ひ起すより悲しきはなし」という言葉は、フ

ランチエスカがダンテに話したセリフで、イタリアの哲学者ボエティウス(Ancius Manlius Torquatus Severinus Boethius, 480-524)『哲学の慰め』(De consolazione philosophiae)にあつた表現が踏まえられている。

「A」による牧師に対する非難は限定的で、「A」は「牧師が博士を殺さなかつたら塵が殺してゐたかも知れない」とし、「牧師も亦大きな無情な歯車の一つに過ぎないのではないか」と考へる。ちなみに有島は一九〇四年七月三一日に、同僚の看護士ロバートとコンストックという名前の患者と一緒に、フランクフォードにある監督教会に日曜礼拝に出かけている。しかし日記には「最暑キ日ニテ満身汗トナリヌ。説教ハサシタルコトナシ。矢張り室ニ残りテ独読書スル方利益ナリキト思ヒヌ」と書いている。この後、「A」による非難の矛先はフレンド精神病院の看護士に向けられる。

こゝにゐる看護夫共は皆んな働き盛りの男達なのに、一週間僅かに四弗の給金を貰つて、碌々仕事もしないのを見ると、凡て無頼な人間であるのが知られる。彼等は病院を「蟲の巢」といつて、患者を「蟲けら」と呼んでゐる。患者は朝夕の挨拶を忘れずにするけれども、彼等はどうかすると起き抜けから看護夫長の眼を忍んで、患者の頬げたに平手を見舞ふやうな事をする。

クエーカー教の教えにもとづいて患者の人格を尊重しながら先駆的な医療を施していたフレンド精神病院でさえ、管理者の眼が行き届かないところで乱暴な言動をおこなう看護士が動めていたというのは、貧富の差のみならず意識の差も著しいアメリカの階級社会の一端が現れたのである。実際に有島は看護士の品位のなさを歎き、「attendants ノ中ニハ心ナキモノ多シ。其患者ヲ取扱フ様時ニ余ヲシテ怒ヲ抑ヘガタカラシム。彼等ハ此院ヲ呼ビテ dog-house ト云フ。彼等モ余ト同シキ給料ト生活ヲナスモノナリ。青年有為ノ身ヲ以テ此ノ如キ閑散ナル仕事ヲ撰ビ、閑暇ヲ利用シテ何事ヲカナサントノ念慮モナク、単に雑食ノ為メニ此院ニアルモノ多キニ見テ、其如何ナル種類ノ人々ナルカヲ知ルニ足ル可シ」と日記に書いている(一九〇四年七月二一日)。「dog-house」とは直訳すると「便所」という意味の俗語で、労働の過重さに対して十分とはいえない賃金で働いていた看護士たちの心の内側が伝わってくる。しかし彼らのなかにも「米国の青年には一寸類のない、女のやうに優しい」一人の「華車な青年」がいた。二〇日ほど前から同じ病房の看護士となつたのだが、彼は「妙に物が恐ろしくつて逆も不寝番が動まらない」といいだし、彼に「慰め」を感じていた「A」がこの夜から彼の代わりをすることになった。彼によれば、「父は二歳の時に死に、病身の母の外に姉が一人ゐるのだが、それが狂気で或る瘋癲病院に送つてある所から、狂人に対して同情が起つて、俳優になりたい自分の希望を暫らく捨て、こゝに来

た」のだという。彼の経歴に「同情」を感じた「A」は「成るべく穏やかな言葉で彼れの心に触れるやうに心懸けた」とする。

(以下、次号)

## 註

本文中の引用に関して有島武郎は『有島武郎全集』(筑摩書房)、内村鑑三は『内村鑑三全集』(岩波書店)からおこなった。なお旧字体は新字体にあらため、ルビは適宜省略してゐる。

(一) 長友雅美「アメリカ合衆国におけるドイツ系移民によるホートピア共同体」(「東北大学大学院国際文化研究科論集」第一三号、二〇〇五年三月、一〇六頁)

(二) John H. Leamon, "The Man and the Minister", The Congregational Christian Historical Society, 1969.

(三) トーキンズ・モーキンス博士の著作(一九四五年以前のもの)。

・ Substitutes for the saloon Houghton, Mifflin & Co Boston, 1901.

・ The social message of the book of Revelation Womans Press, 1920.

・ The Christian Church and the Modern World The Macmillan

Company, 1924.

・ The Holy Spirit, The Abingdon Press, 1930.

・ Jeremiah the Prophet The Macmillan Company, 1930.

・ The Life and Times of Alexander McKenzie Harvard University

Press, 1935.

・ Pastoral Counseling Commission on Evangelism and Devotional Life, 1940.

・ Daniel Evans' Teacher preacher, theologian Pilgrim Press Boston, 1944.

The romance of the ministry The Pilgrim Press, 1944.

(4) ハーバード大学附属図書館には(き)の二冊のノートが収蔵されてゐる。

・ Notes in German and church history, 1893. Harvard University Curricula Manuscript. 213 p. 27 cm Notes in German 8, 1893-1894. Notes in church history, 1894-1895.

・ German literature, Goethe, 1888. Harvard University Curricula Manuscript. 1 v. 21 cm.

(5) ジャック・ラカン『精神病』(下、小出浩之他訳、一九八七年九月、岩波書店)二〇頁。"LES PSYCHOSES Le Séminaire de Jacques Lacan, Livre III, Texte établi par Jacques-Alain Miller"

(6) 新宮一成『無意識の病理学——クラインとラカン』(一九八九年一月、金剛出版)四五頁)

(7) 東京神学大学神学会編『増補版 キリスト教組織神学事典』(教文館)一九七二年二月、三一九〜三二〇頁)

(8) ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』(岩波書店、二六四頁)

(9) 同右

[おにし・やすみ] 本学教員]